

# 卓状墓の展開

－丹後・但馬・丹波地域の独自の弥生墓制－

福島孝行

## 1. はじめに

赤坂今井墳墓は丹後・但馬・丹波地域の弥生時代後期墳墓中最大規模であり、最重要の弥生墳墓であることは論を待たない。その赤坂今井墳墓を知るためには、この墳墓が丹後・但馬・丹波地域の中で、時間的・空間的にどのように位置づけられるのかを解明する必要がある。今回の検討では、墳丘について検討を加えることとしたい。

## 2. 丹後・但馬・丹波地域の弥生墳墓の展開

丹後・但馬・丹波地域の弥生墳墓については、カジヤ遺跡の報告を皮切りに「方形台状墓」としての位置づけが行われてきた。筆者は拙稿において丹後の弥生時代墳墓を近藤義郎氏<sup>(注1)</sup>・野島永氏<sup>(注2)</sup>の定義に照らして、全面的に見直しを行った研究を発表した<sup>(注3)</sup>。冗長となるため引用はしないが、各墳墓を検討するに当たって定義の整理は、今一度確認しておきたい。

### (1) 定義の整理

弥生時代の墳墓遺跡について学史的な名称である「方形周溝墓」「方形台状墓」「墳丘墓」について、墳墓の造営手法の違いに着目し、遺跡の観察から導かれた定義を行ったのは近藤義郎氏の「古墳以前の墳丘墓」<sup>(注4)</sup>である。この後、都出比呂志氏によって再定義が行われたが、墓制の変遷とその地域性を検討する際、依然として墳墓形態の定義は近藤氏<sup>(注5)</sup>のものが有効である。

近藤氏による「方形周溝墓」「方形台状墓」「墳丘墓」の定義は以下の通りである。

方形周溝墓とは「おもに溝によって」墓域を画そうとするもの、台状墓は「おもに周囲の削りだしによって墓域を画そうと」するもの、墳丘墓は「おもに盛土によって墓域を画し形成しようとする」ものである。一方、近藤氏の論文では弥生墳墓の特徴の説明の中には、「墓域」という用語は姿を消す。代わりに用いられるのが「墳丘」である。「墓域」は概念的な墓の範囲であり、「墳丘」はそれを視覚的な立体的構造物として表現したものと捉えることができる。つまり、これから議論しようとしている丹後・但馬・丹波地域の墳丘を持たない墳墓はこの時点では想定外であり、ひいてはこの定義の外であるとする

ことができる。

## (2) 丹後地域における弥生時代後期の墓制—卓状墓の提唱—

丹後・但馬・丹波地域の弥生時代後期は他地域同様、非常に強い地域性を発現させる。特に墓制において顕著であり、それは墳墓形態にも現れる。ただし、従来「台状墓」という位置づけによって一括されていたためにその具体相は不鮮明であった。そこで、先述の定義に従って厳密な分類を行う。

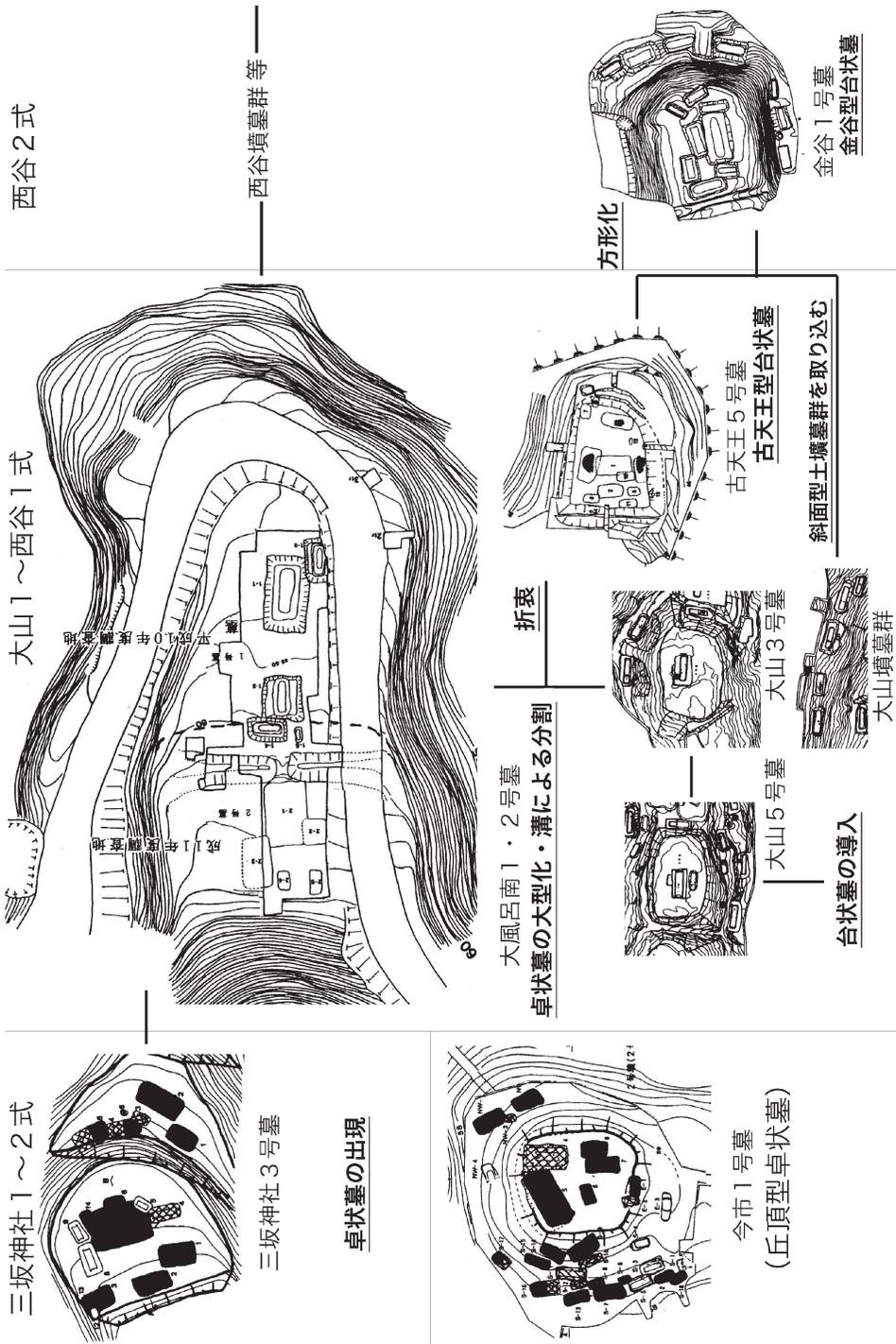
ア) 土壙墓群の分離 まず左坂墳墓群は墓域の造営を削り出しによって行っていない。従って、これは木棺土壙墓や甕棺墓を含む土壙墓群である。この左坂墳墓群は、墓壙は位置原理からさらに細分可能であるが、詳細は京都府埋蔵文化財研究会資料「弥生時代の墳墓と祭祀」に投稿した拙稿「いわゆる丹後地域方形台状墓概念の再検討」を参照していただきたい。<sup>(注6)</sup>

イ) 狭義の方形台状墓の抽出 裾にテラスを設け、墳丘を削り出しにより形成するものは、最も古いもので大山墳墓群第4・5号墓であり、これにやや遅れて大山墳墓群第3号墓が成立する。これらは弥生中期に丹後に存在しなかった台状墓が中国地方山間部から導入されたとすべきものである。

ウ) 卓状墓の提唱 高野編年三坂神社1・2式から大山式期までの墳墓でこれら以外の墳墓は、全て丘陵の一部を削平し、平坦面を造成することによって墓域を形成し、明示している。しかし明らかに墳丘をもつものではない。これまで「台状墓」と呼ばれ、また古墳時代に入っては「階段状古墳」・「だんだん古墳」などと呼ばれてきたこの墳墓に新たな名称を与え、従来の墓制分類から独立させる必要がある。そこで、この墳墓にはその形成が平坦面を造成することによって足ることをテーブルに見立て、さらにテーブルを漢字1字で「卓」と表し、「卓状墓」とする。

卓状墓は、丘陵上において削り出しによって平坦面を確保することで墓域を確定する。おそらく成立当初は、まさにこの1点のみが卓状墓の必要且つ十分な条件であったと考えられる。従って丘陵上の占地により平面的な形態はいかようにも変化しうる。弥生時代後期初頭の今市墳墓群と三坂神社墳墓群は平面形状は似ていないが、両者とも削り出しによって平坦面を確保することで墓域を確定している。弥生時代後期初頭の丹後・但馬の弥生人は平面形状に何ら拘ってはいないのである。

丘陵尾根線上に連続して造成されることが多いこの墳墓は、時として下位にある墳墓を上位にある墳墓の墳丘裾として認識することが行われるが、これは時間差をもって築かれる墳墓を共時的に見ることによって起こる錯覚である。また従来からこうした墳墓が台状墓を簡略化したものと見る見解もあるが、「簡略化」「退化」というものはそのモデルとな



第1図 丹後地域弥生時代後期墳墓形態変遷図

る完成したものの存在が先行して存在することにより初めて検証できるものである。弥生時代前期の七尾墳墓を除けば、台状墓の造営が始まるのは大山式以降であり、先行して造営される卓状墓が後続する台状墓の影響を受けるとするのは論理矛盾と言える。

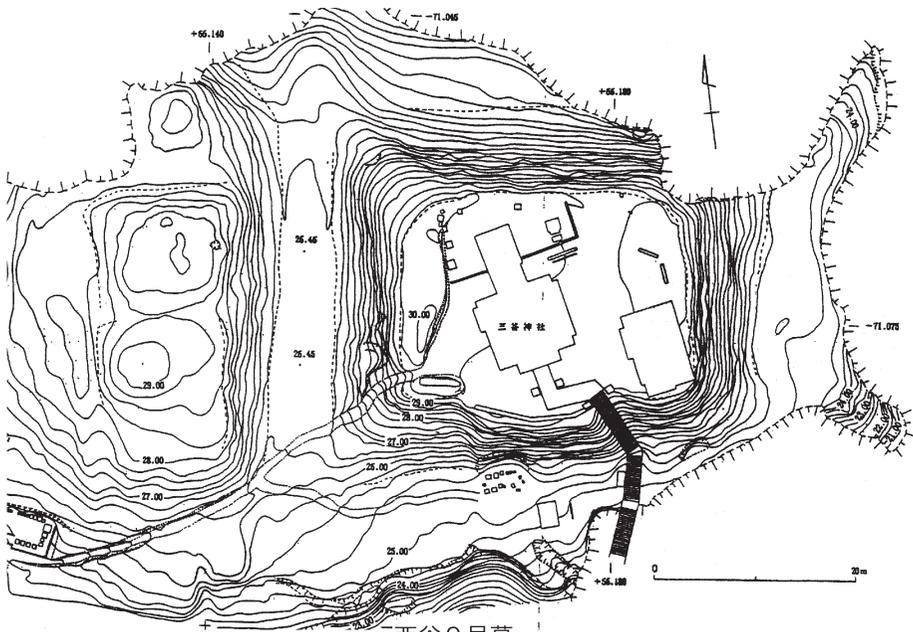
この卓状墓は、大山式期の大山墳墓群7・8号墓、周辺13・14主体部を造営する平坦面（これらは報告の段階では独立した墳墓とは見られていなかった）、荒神山墳墓群、西谷式期では西谷墳墓群、犬石西B墳墓群、帯城墳墓群A地区、庄内式併行期では内和田墳墓群、大田南5号墓など弥生時代後期から終末期を経て古墳時代にも受け継がれ、確認した限りにおいては、左坂古墳群などでは古墳時代後期前半まではその命脈を保ち続け、横穴式石室の導入と共に姿を消すのである。最上級首長が前方後円墳や大円墳を造営している傍らで、丹後の中小の首長達は弥生時代から受け継いだ伝統的な墓制である卓状墓系譜の古墳を造り続けていたのである。このように畿内地域に存在しない墳墓形態をそのまま古墳時代に引き続き造り続けた様相については、拙稿で詳述したのでそちらを参照して欲しい。<sup>(注7)</sup>丹後地域はそうした意味で畿内王権の思惑通りにならない独自の地域であったのである。

### (3) 金谷型台状墓の成立と赤坂今井墳墓

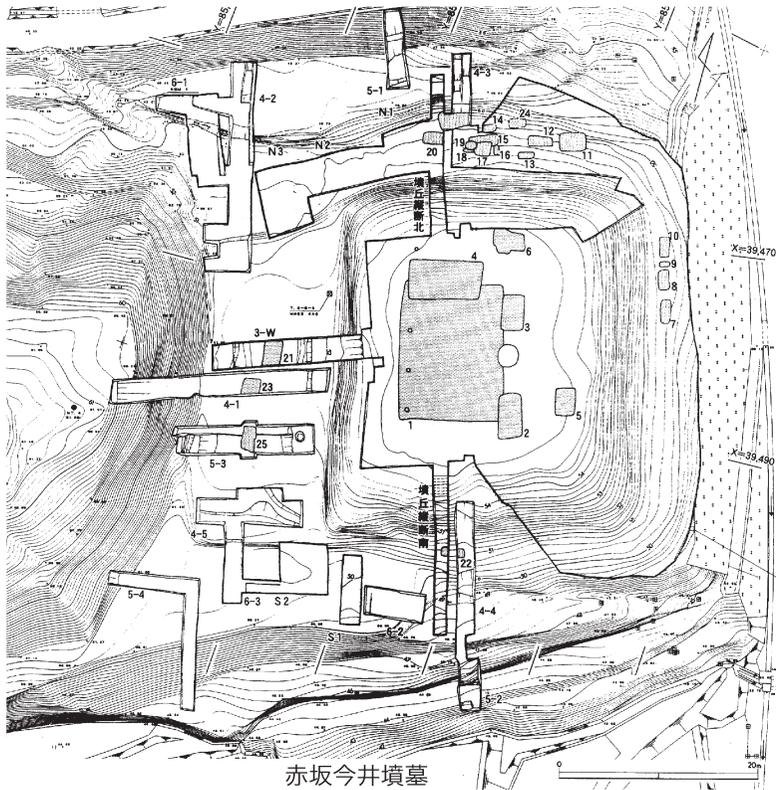
中国地方山間部から移入された台状墓は古天王5号墓の段階で変質を余儀なくされる。そもそも台状墓の平面形態は隅丸(長)方形か円形である。しかし古天王5号墓の形状は丘陵の等高線に沿った形状を呈し、丘陵低位側に等高線に沿って弧を描く区画溝を穿って墳端としている。これは卓状墓を何代かにわたって造営してきた結果、台状墓の築造が要請されても卓状墓の影響を受け、折衷的な形状を生じていると判断される。これを古天王型台状墓とする。

西谷2式期にいたり、山陰各地で大型の四隅突出型墳墓が形成され、丹後からも供献土器が贈られるような関係が成立するところになると、金谷1号墓・浅後谷南墳墓など丹後・但馬・丹波地域の墳丘形状は截頭方錐形化する。これは山陰の四隅突出型墳丘墓の影響である可能性が高い。

一方でそれまで特定の墳墓に従属することが無く、墳墓群全体に付属していた帯状型斜面型土壙墓群の一部を取り込み、それを計画的に配置するためのテラスを3方に配するという形状が成立する。これは周辺埋葬が行われる時に個別に斜面に平坦面を削り込んで作っていた作業を、首長墓の造営時に計画的に配置することを目的としたものである。単なる墳丘裾の再利用ではないことは、赤坂今井墳墓のこの部分が、削り出しではなく、盛土によって築造されていることにより明らかである。この両者の特徴が加わったものが金谷型台状墓である。繰り返しになるが、金谷型台状墓は尾根から切り離されない截頭方錐形で、3方の墳丘裾に周辺埋葬用の平坦部をもつというものである。金谷型台状墓は基本



西谷9号墓



赤坂今井墳墓

第2図 西谷9号墓と赤坂今井墳墓の墳丘比較図

的に単独墓であると見られる。弥生時代後期後葉に金谷型台状墓が成立した後も、野田川町西谷墳墓群(後期後葉)、内和田墳墓群(後期末：庄内式併行期)などで卓状墓は並行して造り続けられる。

赤坂今井墳墓はこの金谷型台状墓にさらに出雲市西谷墳墓群などで見られる丘陵高所側を完全に切り離すという墳丘構築法を取り入れ完成する。第2図の出雲市西谷9号墓と赤坂今井墳墓を見比べていただきたい。四隅が突出していないことを除けば、両者は非常によく似ていることが首肯される筈である。墳丘の高さを4mにもするものは四隅突出型墳墓の中でも西谷墳墓群・下山墳墓・西桂見墳墓に限られる。赤坂今井墳墓の墳高も4mに達し、墳丘の形状もよく似ていることから山陰の大型四隅突出型墳墓の影響を受けていると見ていいだろう。

赤坂今井墳墓の成立後、金谷型台状墓は分布範囲を広げるが、その規模はかえって縮小する。兵庫丹波の内場山墳丘墓はその好例である。このほか、京田辺市田辺城下層墓、など丹後地域の影響を強く受けた墳墓は畿内地域に点在する。一方、方形周溝墓は、弥生時代中期後半には丹後・但馬地域で普遍的な墳墓形態の一つであったが、弥生時代後期入ると見られなくなる。しかし庄内式併行期である弥生時代末期には丹後半島内に再び方形周溝墓が築造され始めると、同時に楕円形の墳墓が南部から入ってくる。白米山北墳墓、大田南2号墳などがそれである。丹後地域は丹後独自の墓制を墨守し、他地域の墓制を排除し続けることができなくなってしまうのである。この時期は北丹波地域に方形周溝墓のみならず、円形周溝墓、前方後方形周溝墓が各地の影響を受け、築造される時期でもあり、全国的に墓制の再編が始まる時期でもある。また海岸部の集落遺跡では山陰地方の土器の割合が増大し、「移民」的な状況を示してくる。そして墳墓の供献土器に山陰系の土器が占める割合が上昇する。それらに伴って丹後の土器の在地的な様相は解体に向かう。丹後の在地的な結合の象徴として登場した赤坂今井墳墓とその類型の墳墓は、こうした庄内式併行期の変化の中で、求心性を失い、やがて前方後円墳体制の成立と共に支配共同体層の墓制から排除され、丹後内部の中小首長の墓制として存続することとなるのである。

#### 4. 結語

丹後・但馬・丹波の三たん地域の弥生時代後期における墓制は、卓状墓を基軸とした展開と、これに方形台状墓の要素が加わって古天王型台状墓、金谷型台状墓と変化する二系統を生み出し、さらに山陰地方の四隅突出型墳丘墓との墳墓要素の交流の中で、赤坂今井墳墓を生み出すという経過を明らかにした。

卓状墓及び赤坂今井型墳墓は、それぞれに周辺地域に影響を与え、古墳時代墓制に部分

的に取り込まれていく。特に金谷型台状墓や赤坂今井型台状墓に見る周辺埋葬用テラスの造成は、古墳時代において段築構造のヒントとなった可能性があることについては既に拙稿で触れた<sup>(注8)</sup>。このほかに安満宮山古墳の形状や鳥取県大口7・8号墳、釣山22号墳、倉見4号墳などにも影響を与えた可能性がある。

また、既に拙稿で述べたように、丹後地域内においては古墳時代後期前半まで、これらの墳墓形態は維持され、中小規模首長の奥津城としての機能を果たし続けたのである<sup>(注9)</sup>。

このように、丹後・但馬・丹波地域において生み出され、この地域の首長層の墳墓形態として大きな役割を果たし、なおかつ周辺地域へも影響を与えた墳形を、これまでのように「台状墓の省略形」としてやや卑下した位置付けをするのではなく、また、墳裾が無く、定まった墳形がないにもかかわらず、「方形台状墓」という用語に引きずられて無理矢理方形に復元するのではなく、自信を持って「卓状墓」・「古天王型台状墓」・「金谷型台状墓」・「赤坂今井型台状墓」と呼びたいと思う。

(ふくしま・たかゆき = 京都府教育庁指導部文化財保護課)

- 注1 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓－榑築遺跡をめぐって－」(『岡山大学法文学部学術紀要』第37号(史学編))1977
- 注2 野島永「京都府北部の貼り石方形墳丘墓について」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1991
- 注3 福島孝行「いわゆる丹後地域方形台状墓概念の再検討」(『弥生時代の墳墓と祭祀』京都府埋蔵文化財研究会)2003
- 注4 前掲注1
- 注5 都出比呂志「墳墓」(『岩波講座日本考古学4 集落と祭祀』岩波書店)1986
- 注6 前掲注3
- 注7 福島孝行「丹後地域前期古墳の規模・墳形に見る階層制と副葬品－丹後地域が畿内政権の支配を受け入れていく過程－」(『京都府埋蔵文化財論集』第5集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 注8 福島孝行「弥生終末期の墓制と古墳の出現」(『季刊考古学』第84号 特集古墳出現前夜の西日本 雄山閣)2003
- 注9 前掲注3・7

#### 補注

文章中の高野編年については以下の論文によった。

高野陽子「丹後地域－擬凹線文系土器の様式と変遷－」(『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター)2006

挿図出典

図1

- 三坂神社3号墓 福島孝行「いわゆる丹後地域方形台状墓概念の再検討」(『弥生時代の墳墓と祭祀』第11回京都府埋蔵文化財研究集会-発表資料集-)2003。原図は今田昇一・肥後弘幸ほか『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』(京都府大宮町文化財調査報告書 第14集 大宮町教育委員会)1998
- 今市1号墓 同上。原図は橋本勝行・中川和『今市古墳群・墳墓群・経塚発掘調査概報』(大宮町文化財調査報告第19集 大宮町教育委員会)2001より
- 大風呂南1号墓 白数真也『大風呂南墳墓群』(岩滝町文化財調査報告書第15集 岩滝町教育委員会)2000
- 大山墳墓群 平良泰久・常磐井智行・黒田恭正ほか『丹後大山墳墓群』(京都府丹後町文化財調査報告第1集 丹後町教育委員会)1983
- 古天王5号墓 丸山次郎『弥栄町内遺跡発掘調査報告書』(京都府弥栄町文化財調査報告第19集 弥栄町教育委員会)2001
- 金谷1号墓 石崎善久・高橋あかね「3. 金谷古墳群(1号墓)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1995

図2

- 赤坂今井墳墓 岡林峰夫・石崎善久ほか『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』(京都府峰山町文化財調査報告書 第24集 峰山町教育委員会)2004
- 西谷9号墓 渡辺貞幸ほか『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』(鳥根大学法文学部考古学研究室)1992